

吉弘嘉兵衛統幸について

豊後高田、屋山城主であった吉弘嘉兵衛統幸は、慶長五年（一六〇〇）九月、豊後別府石垣原の戦いで、主君大友義統に殉じて壮烈な戦死をした。現在、別府市石垣西六丁目の吉弘神社に祀られている。

一 大友田原系吉弘氏の出自

吉弘氏は豊後大友田原氏の庶流である。田原氏三代直貞（正曇）の嫡子四代直貞の弟、直貞の二男又三郎正賢が吉弘氏の初代となる。法名を正賢と称した。

二 武蔵郷吉広と吉弘楽

吉弘正賢は武蔵郷（現東国東郡武蔵町）武蔵川支流吉広川上流の丘陵上に吉広城を築き、姓も吉弘氏を名乗った。山麓には吉弘氏の菩提寺永泰寺を建立している。

矢島 嗣久

付近の民家の庭先に吉弘家七代の墓と伝えられる無縫塔と五輪塔がまとめられている。

七代の墓から県道をへだてた北側、吉広川のそばに楽庭八幡社がある。旧暦六月十三日に五穀豊穡、害虫防除を願って楽打ちが行われる。

平成四年の台風で樹齢八百年といわれる杉の原木が倒れ社殿が壊されたが、再建されて以前のように盛大に吉弘楽が催されている。



重要無形文化財
吉弘楽

三 国東郷屋山城

吉弘氏は七代親信ちかのぶから八代氏直うじなおの代にかけて都甲松行みやまのり（現豊後高田市東部）の地、屋山（八面山、標高五四三m）の麓に居館を造り、屋山城を詰城とした。

吉弘石見守親信は、天文元年（一五三二）、周防の大内義隆軍と博多々良浜に戦い、筑前争奪戦で戦死した。

天文三年（一五三四）四月、大内義隆の部下杉長門守すぎながもんすけと陶晴賢たわはるがたの軍勢三千余騎と豊後大友方総大将吉弘石見守氏直軍二千八百余騎とが豊後勢場が原（現速見郡山香町大牟礼山）で戦い、氏直が戦死する。

氏直の嫡子吉弘九代鑑理かみだりは大友義鎮よしみち（のちの宗麟）の加判衆を勤め、吉岡長増ながさき、臼杵鑑速あきはやと共に豊後の「三老」と称された。

鑑理は、日向耳川で討ち死にしたという説もあるが、元龜二年（一五七二）頃病死したようである。

四 日向高城と耳川合戦

天正六年（一五七八）春、鑑理の嫡子吉弘十代鎮信ちかのぶは、日向土持氏征伐に出陣する。秋には日向高城合戦（宮崎

県児湯郡）に出陣、田原紹忍親賢しやうにんちかたの麾下となったが、同十一月十二日に戦死した。

鎮信の嫡子松市太郎が、天正四年（一五七六）統運とんうんと称し、天正十一年（一五八三）から吉弘十一代統幸とんさきと改める。左近大夫、左近入道、嘉兵衛尉かひょうのじやうと称した。母は三老の一人、臼杵鑑速あきはやの女である。

元龜二年（一五七二）頃、統幸は祖父鑑理の希望により宗麟から国衆に準じての奉公を認められる。

天正七年（一五七九）頃、統幸は大友宗麟義鎮の嫡子ちか義統よしたかから屋山城（豊後高田市）修築を命ぜられている。翌八年、田原親宏ちかひろの養子田原親貫ちかぬきの乱に際して、屋山城に籠城し、鞍懸城（豊後高田市佐野）の擲手を押さえる。同年閏三月、親貫がこもる鞍懸城攻撃に参加した。九、十年（一五八一、八二）には豊前の反大友党を討つ。

天正十四年（一五八六）十月中旬、島津軍が日向、肥後方面から豊後国に攻め入る。十二月、戸次川（大野川の支流）の戦いで大友、四国連合軍が島津軍に敗れ長宗我部信親のぶちかが戦死する。大分川の左岸北側の祇園河原（現広瀬橋北側）に陣を敷いた吉弘統幸軍三百余騎のみごと

な軍立てをみて、島津軍は警戒して、大分市曲まがりの守岡山（現府内大橋の東側）に一時退き宿營した。

しかし、大友義統は府内（大分市）から高崎山城へ退き、なお安心院町の竜王城まで逃走する。これが後の豊後国除国の原因ともなった。

五 文禄、慶長の役

文禄元年（一五九二）三月、豊臣秀吉の命により、豊後大友吉統（義統）は六千余人を引き連れて朝鮮に出陣する。義統は秀吉から一字をもらって吉統よしむねと名乗った。

翌二年一月、明軍二〇万の大軍による平壤攻撃の報に吉弘統幸は「主君吉統の帰陣を待って退却するか、しないかを決定すべき」と主張したが、大友軍は総崩れとなった。その結果、五月には秀吉から豊後国を没収され、秀吉の蔵入地となる。

統幸は、朝鮮役で明将李如松の軍旗を奪った功により秀吉から朱槍をいただいた。

吉統除国後、吉弘統幸は筑後柳川の従兄弟立花宗茂を頼り、二千石を受ける。

吉弘鑑理の二男で、統幸の父鎮信の弟にあたる鎮種しげたねは元亀元年（一五七〇）に筑前高橋姓を継ぎ、高橋主膳鎮種入道と名乗り、紹運と号した。立花統虎たかしら（後の宗茂）、弟高橋統増たかしらの父にあたる。

高橋紹運鎮種は、天正十四年（一五八六）七月、筑前岩屋城（太宰府町）で島津軍の猛攻を受けて壮烈な戦死をした。

六 小藩分立

天正十五年、秀吉が九州を平定し、豊前中津に黒田如水すいたか高を一二万石に封じた。

秀吉は、文禄三年（一五九四）に、府内（大分市）一万三千石は早川長敏ながとし、岡（竹田市）六万六千石は中川秀成ひでなり、臼杵六万石は福原直高なおたか、安岐（安岐町）一万五千石は熊谷直陳、富来（国東町）二万石は筑（垣見）家純いんげん、高田（豊後高田市）一万五千石は竹中重利しげとに与え、六藩に分割した。

七 関ヶ原の戦い



吉弘嘉衛兵統幸

慶長三年（一五九八）に秀吉が死去したため、翌年になって大友吉統（義統）は許され、江戸から京都へ移り、本能寺の一室に側室と男児正照まさてるとともに住んだ。

秀吉の死後、大阪で徳川家康と石田三成とが対立して、戦いの機運が近づいた。

慶長五年（一六〇〇）、大友吉統は、大阪方から末子正照と側室を大阪城へ連れ去られてしまう。吉統は、同年九月、安芸（広島県）の大島にくんだり、毛利輝元から兵船と鉄砲隊一〇〇を与えられて、東軍徳川家康側から

西軍石田三成、毛利側に変更して、豊後入りを決意させられた。

その途中、柳川の立花宗茂のところに身を寄せていた吉弘統幸が、江戸の徳川家康や秀忠に仕えていた吉統の長男能乗のりのりに仕えるために小倉から乗船して、周防上関（山口県柳井市の南方）で吉統に出会い、東軍に味方するよう説得した。しかし、吉統はそれを聞き入れなかった。やむなく、統幸は江戸行きを中止して、吉統に従うことにした。

関ヶ原の戦いは、慶長五年九月一日に行われ、小早川秀秋が西軍から東軍側に味方したため、徳川家康軍の大勝利となった。

八 豊後石垣原の戦い

吉統は慶長五年九月九日、豊後別府の浜脇に上陸後、立石（観海寺西北の南立石）に陣をしいた。竹田の中川に預けられていた旧臣田原紹忍親賢、宗像掃部鎮統ちかむねらが参加した。吉弘統幸は、国東富来に上陸後、安岐や武蔵をへて別府の吉統に合流した。

当時、豊後木付城（杵築城）は、丹後宮の津の細川忠興の城代、松井康之、有吉立行がおかれていた。木付城には反乱防止のため、速見郡内（別府を含む）の庄屋から人質を取っていたため、大友軍は木付城を攻めたる。大友軍は二の丸の人質を奪回したものの、木付城本丸の占領は成功せず、真那井（日出町）の港から乗船して別府へ戻った。

東軍方黒田長政の父、豊前中津城の如水孝高は、国東に進軍して西軍の富来城（国東町）と安岐城を攻めたのち、木付城を救援した。

東軍の先鋒、木付城の松井・黒田連合軍が別府へ進攻し、先鋒松井軍は別府の表相寺山に、黒田軍はその西側の加来殿山（現大字鶴見）に陣をとった。

大友軍は大友吉統（義統）と田原紹忍親賢が立石村古屋園（現別府市南立石本町）に本陣を敷き、右翼は坂本村（現杉の井ホテル付近）に吉弘統幸が、左翼には御堂ヶ原（現堀田）の高台に宗像掃部鎮統が陣を敷いた。合わせて九百余騎といわれている。

統幸は

明日は誰が草むす屍や照らすらん

石垣原の今日の月影

という辞世の歌を詠んだ。

九月一三日、松井、黒田、竹中（高田城）軍の先鋒三千余騎が表相寺山と加来殿山に陣を敷いたのを見た大友軍は、立石の高台から出陣して境川を渡り石垣原で決戦をいどんだ。

最初は大友側吉弘統幸軍が優勢であったが、衆寡敵せず大友軍は、吉弘統幸及び宗像掃部以下の主だった武将たちが戦死した。統幸は享年三八歳である。

大友吉統は自刃しようとしたが田原紹忍親賢に止められ、黒田如水に降参した。

吉統は中津城から江戸へ送られ、徳川家康から出羽秋田の秋田実季に預けられ幽閉された。

九 合戦以後

吉弘統幸の墓は、都甲荘松行寛（現豊後高田市松行）の金宗院に葬られた。また、別府市石垣西六丁目に吉弘神社がある。この神社は大正十一年（一九二二）に拝殿



が建立された。拜殿の裏手西側には統幸の石柱の墓や肥後の細川家が建立した石殿が安置されている。

毎年、春と秋の例祭には吉弘家一族の方々が、東京、久留米市、福岡市等の各地から参列される。

吉弘神社では、平成十二年（二〇〇〇）に吉弘統幸候四百年祭を計画している。

別府市石垣西三丁目には、吉弘統幸の菩提寺「太平山宝泉寺」がある。この寺には統幸の位牌や肖像画が保管されている。

引用参考資料

- 大分県の歴史 渡辺澄夫著 山川出版社
- 大分の歴史 四 渡辺澄夫 大分合同新聞社
- 栄光吉弘氏の累代 編著者 馬場始年
- 吉廣（吉弘）家の歴史 吉弘俊治編
- 別府史談 第5号 屋島嗣久